



統計から社会の実情を読み取る

第60回 望まれているのは男の子、女の子？

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)等。ダイヤモンド社のダイヤモンド・オンラインにWebコラム「本川裕の社会実情データ・エッセイ」を連載中(隔週)。



欲しいのは男の子、女の子？

この連載で、以前、「生まれ変わるとすれば男？女？」についてふれた(第3回〈2011年9月号〉)。そこでは、戦後の長い意識変化を見ると、男性は一貫して男に生まれたいとしているが、以前、男に生まれ変わりたいとしていた女性は、今では、圧倒的に女に生まれたいと考えようになったことを紹介した。今回は、自分の子どもとして男児を望むか、女児を望むかについての意識の変化を見てみよう。

「生まれ変わるとすれば男？女？」の時と同じように、統計数理研究所の「日本人の国民性調査」を使い、欲しい子どもは男の子？それとも女の子？という問いに対する回答結果について、この問いの調査がはじまった1988年以降の推移をグラフにした(図1)。

男女計で見ると、バブル経済期だった1988年には男の子の方がよいとしていた方が多かったのに、今や女の子の方が欲しいとする者が多くを占めるようになったという変化がこの25年間に生じている。この変化は主として1988

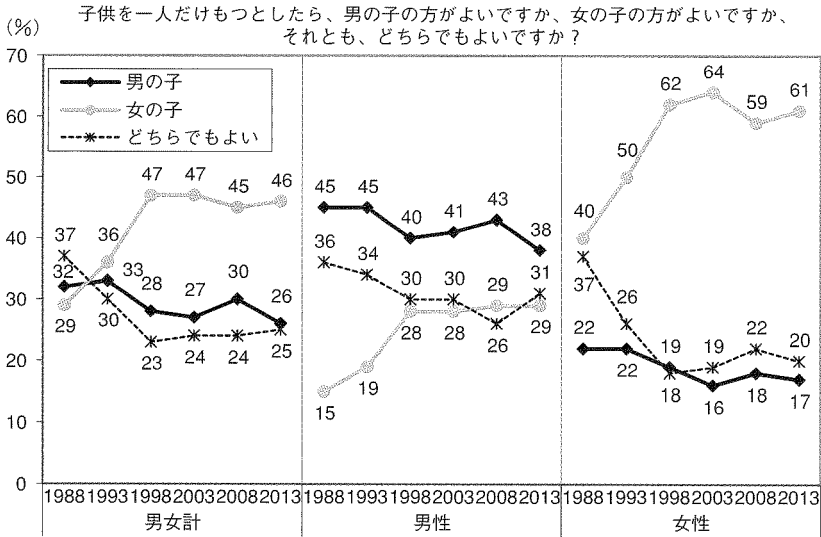
～98年の10年間に生じており、その後は、余り変化がない。

男女別に結果を見ると、男性は女の子を欲しいとする者が増えているが、なお男の子を欲する比率の方が多い。一方、女性では、女の子を欲する者が男の子を欲する者の3倍以上と圧倒的な多数となっている。

女の子の方がよいと思うようになった理由として考えられるのは、女の子の方が可愛いとか、将来子どもに世話やケアを頼みたいとか、子どもが一人だけなら一生楽しくつきあえる女の子が望ましいなどと親の利害の観点で考えているためと、もう一つ、生まれてくるなら女に生まれてきた方が楽しい一生が送れると思う子どものための観点(親心の観点)とがありうるだろう。

これは、日本だけの傾向なのだろうか。同じ質問を行っている2006年の東アジア4か国比較調査の結果データを見てみると、日本では女の子が男の子を上回っているのに対して、韓国、台湾、中国ではいずれも男の子が女の子を上回ってお

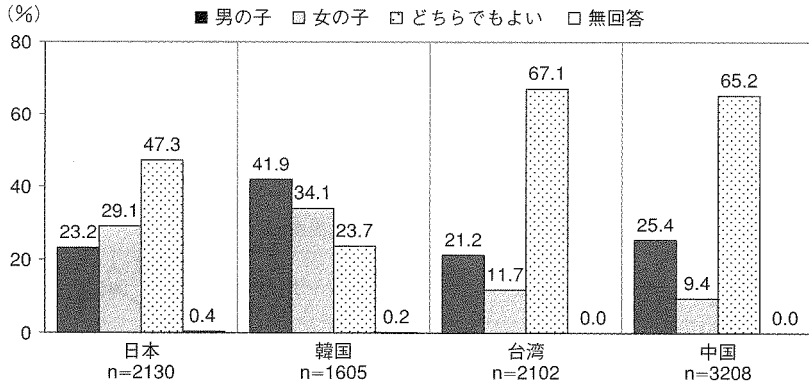
図1 欲しいのは男の子、女の子？



注) 回答には表記の他「その他」「分からない」があるので必ずしも足して100にならない。
資料) 統計数理研究所「日本人の国民性調査」

図2 欲しいのは男の子、女の子？（東アジア各国比較）

もし、子どもを1人だけもつとしたら、男の子を希望しますか、女の子を希望しますか。



注) 2006年に実施された各国共同調査(EASS2006)による(日本は20~89歳、韓国は18歳以上、台湾は19歳以上、中国は18~69歳の男女が対象)。nは回答者数。

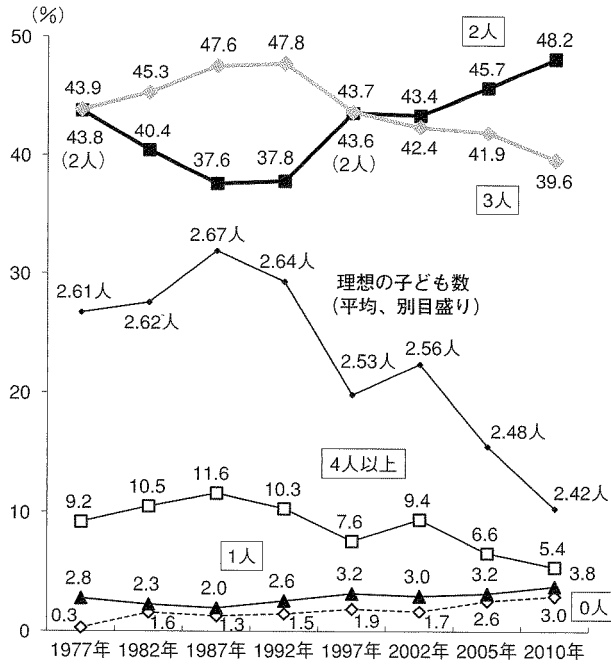
資料) 大阪商業大学 JGSS 研究センター「East Asian Social Survey: EASS 2006 Family Module Codebook」2009年3月

り、日本だけの傾向であることが分かる(図2)。

日本以外の国も少子化が進んでいる点では共通しているが、日本以外の東アジア諸国は、このデータを見る限り日本の1988年の段階に近い状態にあり、いずれ、日本と同じように、女の子の方を優先して欲しいというようになるの

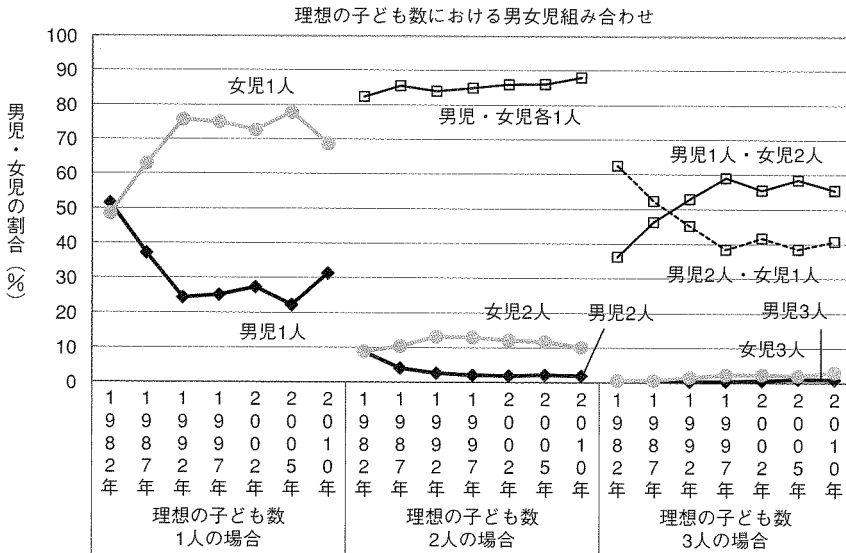
か、それとも、現在のままなのかは、不明である。出生児の男女比から、中国や韓国では、男の子を欲しいという希望が実際の産み分けにまでつながっていることが明らかになっているが、日本の出生児の男女比には以前と変化がなく産み分けはないようだ。

図3 理想の子ども数の推移



注) 全国の妻の年齢が50歳未満の夫婦が対象(回答は妻に限定)
資料) 社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(夫婦調査)」

図4 望ましい子どもの男女構成



注) 理想子ども数が1人以上の初婚どうしの夫婦のうち、男女児組み合わせに理想があると回答した夫婦が対象。理想子ども数4人以上の組み合わせについては省略。2010年の場合、理想の子ども数1人、2人、3人の場合の組み合わせ回答者数は、それぞれ、83人、1,988人、1,470人。
資料) 社会保障・人口問題研究所「出生動向基本調査(夫婦調査)」

望ましい子どもの男女構成

「一姫二太郎」という言葉がある。これは、最初に女の子、次に男の子が生まれると子育てやきょうだい関係の面などから好ましいということであらわす言葉である。女兒の方が生命力が強いので、未経験の母親にとっては最初の子としては女兒が安全だと理解する見方もある（西田利貞『人間性はどこから来たか—サル学からのアプローチ』1999年）。この言葉は、男の子2人に女の子1人という構成の子ども3人が好ましいと誤解されることもあるようだ。

このように、生まれてくる子どもの男女構成についてはいろいろな思いが抱かれる。ここでは、理想の子ども数に合わせて男児と女兒の理想の構成を抱いている夫婦にその構成をきいた国立社会保障・人口問題研究所の調査結果を紹介しよう（回答は妻に限定）。

子どもの男女構成についての意向を見る前に、まず、理想の子ども数そのものについて見ておこう（図3）。

実際に生む子どもの数をあらかず合計特殊出生率は1.42（2014年）と2を大きく下回っているが、夫婦が描く理想の子ども数の平均は、図中に示した通り、2を大きく上回っている。もっとも、理想の子ども数は、1977年から1987年にかけては増加し2.67人のピークとなった後、ほぼ一貫して減り続け、2010年には2.42人まで下がっている。具体的な子ども数としては、2人か3人が合わせて9割近くを占めている点には変わりがないが、一番多い理想の子ども数が、1997年を境に、3人から2人に逆転していることが平均数の減少に大きく影響している。この他、ピークでは1割以上いた4人以上が2010年には約5%に半減し、ほとん

どいなかった0人が3%までに増えている点などが目立っている。

さて、こうした状況の中で、望ましい男女構成としては、理想子ども数が1人の場合、1982年には、男児が女兒をやや上回っていたが、その後10年間で大きく意向は変化し、1992年には女兒4分の3、男児4分の1という圧倒的な女の子志向の構成にまで変化した。1992年以降は、ほぼ、その割合に変化がない（図4）。

理想の子ども数が2人の場合は、基本的に、男女1人ずつが理想パターンであるが、どちらか一方だけとすると1997年までに男児2人より女兒2人が圧倒するようになった。その後、女兒2人志向はやや割合を減じてきており、バランス志向の方向とはなっている。

理想の子ども数が3人の場合、1982年には男児2人女兒1人が男児1人女兒2人を大きく上回っていたが、1992年には両者は逆転し、1997年には後者が前者を大きく凌駕した。その後は、ほぼ、変化なしである。

このように、バブル期をはさんで日本人の気持ちは大きく男児志向から女兒志向に変化し、その後は、ほぼそのまま推移するかたちになっている。

最近の2010年結果では、全体として、女兒志向の基本線は変わっていないが、それでもやっぱり少しは男児も欲しいというバランスを取る方向にやや復帰しているようだ。

図1の調査結果と比べると、1980年代から90年代にかけて大きな意識変化が起こり、その後は落ち着いた推移である点が共通である。欲しい子どもの性別に関する日本人の考え方が、何故、この時期に大きく変化したかについては、今後、さらなる研究が必要である。